

👉 「勝利の女神は細部に宿る（その②）」

試合が終わり、歓声が静まり、コートにただ汗のしずくが残る時間がある。

得点や勝敗というはっきりした指標が、人の目を惹きつけるのは当然だ。

だが、見逃してはならないものがある。そこに至るまでの、目立たぬ努力や、わずかな一歩。

数字に表れない成長の証が、静かに息づいている。

「いつもより声が出ていたね」

「最後まであきらめずに走っていたよ」

そんな言葉が自然に口をつく瞬間がある。

見てくれていた――その実感が、**選手の心に灯をともし**。

勝利の喜び以上に、記憶に残るのは、そういう瞬間かもしれない。



「勝ちたい」という気持ちは、大切だ。だが、もっと大切なのは、「誰と、どんな姿勢で、どんな思いで勝ちたいか」。そして、それを「どう言葉で伝えるか」より、「どう背中で示すか」。

沈黙の中に宿る本気こそが、人を動かす。

子どもたちは、大人が思う以上に、よく見ている。言葉より行動、叱咤より信頼。

日々の振る舞い、まなざし、沈黙の時間の過ごし方まで、実に敏感に感じ取っている。

だからこそ、指導とは、声を張ることではない。大声を出さずとも、伝えられることがある。

結果に一喜一憂せず、プロセスを信じる。焦らず、見逃さず、目の前の一人ひとりに丁寧に向き合う。それが支えるということだろう。

勝利の女神は、華やかな一瞬に惹かれるようであり、実は地道なまなざしを見ている。

光を浴びる場面より、陰で繰り返される対話にこそ、彼女は静かに頷くのではないか。

コートに残る汗のしずくを見つめながら、そんなことを思う。

試合は終わっても、**指導者としてのまなざしは終わらない。**

** 「余録」 **

背中が語るもの……



子どもたちの成長を支えるうえで、言葉以上に深く伝わるものがあります。

教育心理学では、指導者の「モデリング（模範行動）」が子どもに与える影響は非常に大きいとされています。つまり、言葉で何を語るか以上に、日々のふるまいや姿勢が、子どもたちの価値観や行動に静かに浸透していくのです。

「日常の姿勢そのものが教材である」。これは、指導者にとっての覚悟とも言える哲学です。挨拶の仕方、道具の扱い方、仲間へのまなざし——それらすべてが、子どもたちにとっての“学び”となります。意図せずとも、私たちのふるまいは常に誰かに見られ、感じ取られています。

他方で、成長はいつも目に見える形で現れるわけではありません。勝敗や記録だけでは測れない「人としての成長」は、時に静かで、気づきにくいものです。だからこそ、取り組み方に光を当て、観察記録や対話メモ、自己評価といった“見えにくい成長”を捉える手立てが重要になります。小さな変化を見逃さず、言葉にして残すことで、子ども自身が自分の歩みを実感できるようになります。

こうした視点は、指導者だけでなく、子どもたちを支えるすべての大人にとっても大切です。保護者の方々や地域の支援者が、日々の関わりのなかで「見えにくい成長」に気づき、それを言葉にして伝えること——それは、子どもたちにとって大きな励ましになります。

私たち大人にできることは、「信じて見守る」こと。すぐに結果が出なくても、焦らず、諦めず、子どもたちの内なる成長を信じ続ける。その姿勢こそが、背中で語る最大のメッセージなのかもしれません。

一、 見守るゆとり

二、 許す心

三、 待つ勇気

Three articles on raising children in our family